「民謡」で見る最新中国像〔Ⅰ〕

何　暁毅

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．十人十色
Ⅲ．役人天国
3.1　官僚たちの「四つの基本原則」
3.2　飲食の芸術
3.21　上に政策あり，下に対策あり
3.22　「タダ」が好き
3.23　効果抜群
3.24　飲食の鉄人
3.25　困った！
3.3　乗り物も身分
3.4　会議の鉄則
3.5　官僚の仕事
3.6　官僚の心得（以上本号）
Ⅳ．我即法律（以下第60巻第１号）
4.1　警官は金数え上手？
4.2　北京の四大「不思議」
4.3　原告・被告一網打尽
Ⅴ．不倫も文明開化？
5.1　投資者ランキング
5.2　年寄りの生活
5.3　人生のコツ

5.4　詐欺は常識？
5.5　先生は塩？
5.6　不倫も文明？
5.61　役人の新追求
5.62　結婚は誤り？
5.63　道徳の乱れ
5.64　愛人が多いほど恰好いい？
VI. 蛇足

I．はじめに

旧ソ連のアネクドート（政治風刺小話）はよく知られているが，中国にも似たものがたくさんある。例えば少し前の話だが，中国人の食卓の主役である豚肉がなかなか買えない。民衆の文句は当時の人民代表大会委員長（国会議長）の耳に入った。そこで議長は怒った：なに，豚肉が手に入らない？それならなぜエビを食べないのか？——当時は普通の中国人はエビを見たこともない時代であると思うと，笑いたくても笑えないのだ。

しかし中国にはもう一種類この手のものがある。それは中国語の特徴を遺憾なく発揮して出来たもので，恐らく中国にしか生まれないものであろう。韻を踏んで読みやすい，音節を揃えて形式の美を意識するなど中国語の特徴を旨く使った創作ゆえに，アネクドートより民間文学の要素が強く含まれ，その時代の現象を鋭く暴き出し，悪と権力を無情に批判し，民衆の営みを暖かく嘲笑する。即ち民衆の，民衆による，民衆のための時事，政治風刺詩である。

それは「民謡」である。

その「民謡」がいまは嘗てない繁栄を誇っている。それは中国社会が嘗てない激動の変革期にあって，題材になることがあまりにも多いからなのだ。特に言論の自由が制限され，民主選挙・世論監督などの手段により民

意を政治に反映させる制度がなく，民衆の社会に対する不満不平が変革期のゆえに非常に多く，発散する必要がある。そこで必然的に民衆はこの古くから大衆によって創作された方法を使った。不満不平が多いのに，何もできない鬱憤をこれで晴らしている。そういうわけで「民謡」がいかに民衆の社会に対する見方をはっきり現れているかを分かるだろう。この文章はいま現在中国にはやっている「民謡」を通じて，民衆の目に映っている中国像を浮き彫りにしたい。

なお，中国語のいう「民謡」は，日本語のいう民謡と違って，メロデーがなく，口コミで伝え，内容も殆ど社会現象のユーモラスな描写及び政治風刺である。「戯れ歌」と翻訳する場合があるが，滑稽なところは近いかもしれないが，政治風刺の毒の濃さから見ればやはりかなり違う。「戯れ歌」はむしろ中国の「打油詩」に近い[1]。因みに日本の民謡は中国の「民歌」に当たる。

Ⅱ．十人十色

改革開放後，悪平等が打ち破られ，収入の違いが生まれた。様々な原因でいままでと随分違う地位の変動が起こった。その様々な原因の中には庶民の理解を超えた部分も少なくない。そこで地位も権力も金もない民衆では，羨む憎む無力感を漂いながら，「偉い順」に人を次のようにランク付けた。

一等人掌実権，点頭晃脳就来銭；
二等人搞承包，喫喝嫖賭全報銷；
三等人大蓋帽，喫完原告喫被告；
四等人当律師，発財全靠打官司；

1）本稿を書き出した段階で創論社出版の『中国「戯れ歌」ウオッチング』（南雲智著）が目にとまった。でも内容が違うし，視点もかなり違うので（こちらはあくまでも普通の中国民衆の目線で），このままペンを進めた。因みに「打油詩」は韻を踏み，音節を揃えて，多くの場合個人創作の，とても読みやすいユーモラスな「詩」である。

五等人干個体，騙完老張騙老李；

六等人手術刀，要想治病逋紅包；

七等人当演員，扭扭屁股就掙銭；

八等人交警隊，馬路旁辺喫社会；

九等人跑採購，年年月月喫回扣；

十等人査衛生，不見好処不発証。

「一等の人間は権力者，頷く振りをするだけで金が手に入る；

二等の人間は請負人，飲・食・女・賭博，道楽のすべてが会社持ち；

三等の人間は法の番人，原告を食い尽くせば，被告を食い尽くす；

四等の人間は弁護士，なんでも裁判で稼ぐ；

五等の人間は個体経営者，張さんを騙せば，李さんを騙す；

六等の人間は医者，病気を治したいなら「心付け」を差し上げる；

七等の人間は芸能人，尻を振るだけで金を稼げる；

八等の人間は交通警察，道路に張り付いて社会を食い尽くす；

九等の人間は仕入れ係，日々リベットを貰える；

十等の人間は衛生監督係，貢ぎがなけりゃ許可書を発行しない。」

このランク付けは面白いほど中国の現実を物語っているので，詳しく説明しておきたい。

一等人掌実権，点頭晃脳就来銭（一等の人間は権力者，頷く振りをするだけで金が手に入る）

いまの中国は経済こそ資本主義的な市場経済に移行したが，政治体制はスターリン式社会主義のままである。所謂専制社会では特権・規制及び差別が多い，法制度も完備ではなく，世論監督もままならないので，勿論一等の人間は権力者である。そして市場経済になって，金銭に対する崇拝が人々を支配し始めると，権力者は手の中の権力を使って金儲けに走るのはごく当たり前の成り行きであろう。

少し前の福建省「遠華」大規模組織的な密輸入事件は記憶に新しい。農業出身の何の背景もない頼昌星はなぜ八百億元にも及ぶ石油・自動車など

の密輸入ができ，あの有名な大慶油田をも一時減産に追い込んだのか？それは廈門の市政当局をはじめ，警察，国家安全部門，税関，銀行などすべての部門の権力者を買収した結果である。「遠華」の「恩恵」を受けた党，市当局，警察，国家安全部門，検査機関，地裁，税関，銀行などの実力者は例外なく庭付きの別荘を手に入れた（二三か所出来た人もいる）。深圳・珠海などの経済開放特区で豪華マンションを購入した人もいる[2]。

極めつけは最近明るみになった全国人民代表大会副委員長（国会副議長相当）成克傑の汚職事件。この人物は92年から98年まで広西壮族自治区政府主席（知事に相当）を務めている期間，権力をフル活用して，ある民間企業から土地の低価譲渡・公共事業の落札・銀行融資の口利き料としておよそ2000万元と804万香港ドルに及ぶ賄賂を貰った。そのほかに幹部の任命権を利用して，59万元・3.5万米ドル・2万香港ドル；計画経済の隙をねらって，許可書などを売買して900万元あまりの法外の利益を得た。おおざっぱに計算すると六年間だけで人民元2912.5万元，米ドル3.5万，香港ドル806万の財（トータルで人民元およそ4000万あまり）を手に入れた[3]。去年まで中国には年収400元未満の絶対貧困人口はまだ5000万人以上いるし[4]，彼が務めた広西自治区は全国でも有数の貧困地域ということを考えると，その貪欲ぶりが人々を絶句させるに十分すぎるほどである。

コツコツ働いて，リストラに苦しんでいる庶民から見れば，権力者になるほど美味しい商売がない。何の苦労もせず，いとも簡単に百万長者になれる。

二等人搞承包，喫喝嫖賭全報銷（二等の人間は請負人，道楽のすべてが会社持ち）

改革開放まえ，中国は旧ソ連式計画経済であったので，あるとあらゆる企業（従業員は二・三人にせよ，二・三万人にせよ関係なく）が国営，若

2）北海閑人「廈門友人談廈門走私大案」，香港『争鳴』誌，2000年4月号
3）「成克傑被開除党籍」，『人民日報・海外版』，2000年4月21日
4）唐鈞「中国貧困与反貧困形勢分析」，『1999年中国社会形成分析与予測』，社会科学文献出版社，1999年

しくは地方政府の公営である。企業の経営者は主管部門から派遣されてくる官僚が務めるのは一般的である。

改革をし始めるとき真っ先に企業の経営者を官僚から，有能な人による請負制に変わった。出発点はいいが，現実はそう甘くない。制度の不備と請負人の資質の問題及び社会全体の拝金風潮の総合作用で，国民全体所有のはずの企業が猛烈な勢いで請負人（経営責任者）の私物に化けた。企業のすべての権力を独占しているから，何を使ったか関係なく自分のサイン一つで会社の金で精算してしまう。それこそ宴会から観光に至り，酷い人は風俗・ギャンブルまで会社につけを回してしまう。

朱鎔基総理の側近の一人とされる朱小華氏は94年から96年まで中国人民銀行（中央銀行）の副行長（副頭取）を務め，後に香港に本社を持つ光大グループの会長を務めた。しかし権力が大きい分，その振る舞いも派手である。報道によると，手続きを踏まずに光大グループの資金3700万元あまりを親族による外国での商売に流用し；他人名義の証明書類を使い，不正で外資銀行に多額の外貨（850万ドル以上）を保有；アラスカ・オストラリア等で会社の資金で豪遊し，370万ドルあまりをギャンブルに費やした；グループの資金を外資銀行に入れて多額の利息を横領したなど，さすが国有銀行の実力者，兎角すれば数百万単位の金を動かして，私物化してしまう[5]。

このような「私物化」現象は，中・小規模の企業でも同じである。西安市機電設備会社の経営責任者周長青氏は1997年1月から11月までの十ヶ月間に渡り，会社の4000万元に上る資金をマカオでのギャンブルに費やした。そのため，会社は危うく倒産する羽目になった[6]。

三等人大蓋帽，喫完原告喫被告（三等の人間は法の番人，原告を食い尽くせば，被告を食い尽くす）

中国の裁判官・検査官・警察官など法曹関係の公務員はみんなつばの広

5）関捷「朱小華堕法網記」，香港『争鳴』誌，2000年4月号
6）「豪賭4000万・国企老総裁在奥門賭場」，『婚姻与家庭』，2000年第8期

い帽子（日本の警察の帽子と似ている）を持つ色違いの制服を着用している。一般の人は彼らを区別せずに「大蓋帽」(Dàgàimào) と呼ぶ。

およそ冗談と思われるかもしれないが，普通なら一番権威のある裁判官は中国では理論的に誰でも成ることができる官職の一つである。1983年「法院組織法」が成立するまで，裁判官になるための資格は何も設けなかったのである。それまで裁判所に配分された退役軍人や，都会の高校卒業生などが裁判官になるのは普通だった。この法律で一応を「裁判官になる人は必ず法律の知識を備えなければならない」という条件を決めた（言い換えればそれまで裁判官になる人は法律の知識が備えなくでもいい)。1995年に「大学の法律科卒若しくは大学の非法律科卒で，法律の知識を持ち，二年以上職歴を持つ」と少し詳しく修正を加えた。しかしこれさえ守っている裁判所は数えるほどしかない。「何の法律の専門知識もない人，酷い場合，高等教育さえ受けてない人が依然として堂々と裁判所に入り，裁判官になるのだ」[7]と専門家は嘆いた。

このように，もっとも権威あるはずの裁判官さえ法律の専門知識どころか，一定程度の教養すらない人がなっている現状では，いくら法律が整備されても法律の公正な執行を保証することは不可能であろう。社会的な金崇拝風潮と権力の極端な集中も手伝って，法律関係の腐敗・汚職・コネ裁判など横行している。

北京市の二軒のお茶の会社がある日突然に福建省安溪県地方裁判所によって同時に差し押さえられた。実はその中の一軒が安溪県のある会社と金銭トラブルがあって，相手に告発された。しかし安溪県裁判所は被告に何の知らせもせず，法廷審理すらせず（被告がすでに債務を償還済みという事実を無視し)，強制執行の手続きに入った。つまり裁判所は法律の手続きを全く踏まず，事実を無視して２つの順調に発展している会社（債務と直接関係なくの一軒を含む)を潰してしまった[8]。なぜそこまで法律を無視

7）賀衛方「法学教授入主法院」，『中華工商時報』，1999年３月17日
8）水興「安溪県法院弁了一件荒唐案」，『民主与法制』，2000年第８期

するのか。裏に何かがあるのは容易に想像できる。

裁判所や，裁判官はこの有様だから，検察官・警察官にはなおさら期待できない。特に地方に行けば警官が乗っているバイクは差し押さえ品か盗難品である。事件を届け出るときまずお金を払わなければならない，さもなければ受け付てもらえない。事件に関する調査費・出張代などすべて請求される。そのかわり，お金を払えばなんでもして貰える。湖南省麻陽県留置所所長張吉武は容疑者の親族からたったの6000元を貰って，留置所の医者と手を組んで収監中の殺人容疑者を精神異常者として逃がした[9]。

四等人当律師，発財全靠打官司（四等の人間は弁護士，すべて裁判で稼ぐ）

弁護士という職業は普通の中国人にはまだ馴染んでない。文革中に弁護士という職業を完全に消されたし，「悪いやつにどうして弁護しなければならないのか」という考え方も結構ある。

弁護士制度を回復してまもなく，1980年実施した『律師暫行条例』は弁護士を国家公務員と決めたが，1993年頃から弁護士業を自由職に改めた。弁護費用の請求と支出も原則，弁護士と当事者に委ねられた。すべての費用は依頼人に請求することになったわけだが，どんな事件でどのくらいの費用がかかるなど，不明瞭な料金体系もあって，普通の人には分からない。裁判の勝ち負け関係なくしっかり収入が入るし，大企業などの顧問弁護士でもなれば，莫大な収入が保証される。誤解はあろうが，庶民の目に映っているのは裁判で金を儲けている姿であった。

五等人干個体，騙完老張騙老李（五等の人間は自営業者，張さんを騙せば，李さんを騙す）

改革開放まえ，明らかに資本主義的な事は勿論のこと，少しでもその臭いがしたら堅く禁止された。文革中はいわゆる「資本主義のしっぽを切る」――どんな些細なことでも「資本主義的」という疑いがあれば徹底的に取

9）新華通信社「私放犯人法不容，看守所長進大牢」，『華商報』，2000年3月12日

り締まる。例えば農家の人が鶏を飼ってその卵を誰かに売ったら，これも立派な「資本主義のしっぽ」として批判される。

改革開放後は自由市場を認められ，自由に物を売買できるようになった。最初は自分の余分のものを売っていたものの，徐々に安いところで卸して高いところで小売りするという最も初歩的な市場経済の形になった。その担ぎ屋のような人たちは開放後最初の自営業者になり，物不足も手伝って，彼らを最初の裕福層に押し上げた。彼ら自身の教養にも問題があるが，それよりエリートたちも含めて国民全体が資本主義，取り分け自由経済に対する理解がたいぶ間違っているので，騙し騙されは日常茶飯事になった。豚肉に水を注入したり，病死したロバを牛肉として販売したり，工業用アルコールを有名ブランドのお酒にしたり（98年お正月に山西省で大規模な中毒事件を引き起こし，三百人くらい犠牲になった），苦労しているはずの粉になった唐辛子は原料の唐辛子より安いのはどう考えても裏がある。だから音楽テープやＣＤなどを買うとき必ずその場でテスト試聴しなければならない。

とにかくこの場で相手のポケットから金を巻き上げたら勝ちという意識が一定の時期において支配的だっだ。自由市場などの自営業者から物を買うとき，きっと騙される，と普通の人は考えるようになった。これは悲しいことによく当たる。私もミネラルウオーターを買ったはずなのに飲んだら水道水・１キロの果物を買ったのに帰って自分で計ったら700グラムしかないなど，数えないくらい騙された。

最もいまは偽物を売っているのは自営業者だけではない，有名デパートさえあまり安心できなくなった。「消費者保護法」を楯に「打仮」（偽物退治）を専門に稼いでいる人が出現したほどである[10]。

六等人手術刀，要想治病逋紅包（六等の人間は医者，病気を治したいな

10）所謂「王海現象」。中国の「消費者保護法」には偽物を販売されたらその偽物の元値の倍を消費者に返さなければならないというきまりがある。山東省の王海青年はそれを楯に，有名デパートの偽物を買って，翌日に返金と賠償金を請求する事によって稼いだが，後に大きな論争を巻き起こした。

ら「心付け」を差し上げる)

これは日本人なら少々意外な感じがするかもしれないが，いまの中国では十等級の中にランクインできるだけでも凄いことで，まして中位の評価なら，適当といえるだろう。

一昔は医者といってもただの国家公務員で，普通の会社勤め（みんな国営工場など）と何ら違いがない。給料が同じで，福祉も同じ，住まいは場合によって大型国営工場の労働者より狭いかもしれない。しかしいまは医療制度などが改革され，病院側経営の自由を手にした。

ところで，肝心の医療体制はむしろ大幅後退した。風邪のような病気でも必要以上の薬を出す；明らかな症状があってもたくさんの検査を強要する；難病でも転院を阻止する；薬を普通の薬局より数倍から十数倍高くする；患者にお金や物を要求するなどもうはや公開の秘密である[11]。報道によると，ハルビン市伝染病院の医者が患者の検査記録を改竄し，正常な人まで入院させて「治療」を行い，荒稼ぎした。しかも関与していない医者が改竄を気付いて指摘したら即病院側にリストラされる。つまり病院ぐるみの行為である[12]。このような酷い行為はもはやモラルの問題ではなく，立派な犯罪であり，患者の病院に対する信頼を根本から否定するものである。

それだけではない。医療保険制度が整備されてないいま，病院側が金を見ないと治療しないことが普通になっている。そのため緊急の場合，金を払えないから治療が遅れ患者の命を落とすことがよく起こる。2000年7月16日零時ごろウルムチで出稼ぎに来た河南省の劉華東氏の子供がお湯に転んで，酷くやけどした。劉氏夫妻はすぐ子供をタクシーで近くのウルムチ市第一人民医院に駆け付けた。入院が必要だから，2万元保証金を先に支払えといわれた。しかし急いでいたのでもちろんそんな大金を持っていない。先に子供を治療して，すぐ金を準備すると付いてきた人まで土下座までしてお願いしたが，認められず追い出された。そのまま別の病院に行っ

11) 「清単不清的困惑」，「光明日報」，2000年7月3日
12) 肖芷茁「発生在哈爾濱市伝染病医院的怪事」，『黒龍江日報』，2000年7月26日

たが，外科がないからといわれすぐさま自治区人民医院へ行った。しかし入院ベッドがないを理由にまたも治療を拒否された。新彊医科大学付属病院にも行ったが同じ理由で追い出された。最後に解放軍のウルムチ総病院に駆け付けた。そこで家から持ってきた5000元の保証金を払ったが，あと50元が足りないのを理由に治療を行って貰えない。劉氏夫妻らの再三の哀願で軍医は何とか入院を許可した。しかし時期もすでに遅し，火傷から三時間も経っていたから子供は帰らぬ人になった[13]。

少し前の話だが，かの有名な陸上の「馬軍団」の指導者・馬俊仁氏が交通事故に遭われ，病院に運び込まれたが，それでも先に手術保証金を払わないと手術できないといわれた。幸いに一緒にいた人がたまたま金を持っていたから，数千元を支払って馬コーチの命を救われた。有名人でもこの有様だから，普通の人，それも社会最低層の出稼ぎ者がいざとなったときこの悲惨な結末になるのも妙に納得できる。

七等人当演員，扭扭屁股就掙銭（七等の人間は芸能人，尻を振るだけで金を稼げる）

芸能人はこのくらいの順位では少し低いと感じるかもしれない。しかし中国では芸能人を差別視されてきた長い歴史から考えると，地位がかなり上ったと言える。

しかも計画経済時代，芸能人といっても所詮公務員であり，収入など，他の人と大した違いはなかった。もちろんいまは全然違う。有名歌手ならコンサートで一曲歌うだけで庶民の数十年分の収入を手に入れる。芸能ニュースでにぎわせているのは某々芸能人が主催側と金銭をめぐってコンサートをドタキャンしたこと，某々芸能人に対して国税局の調査が入ったことなど。最も質の悪いのはコンサートで「仮唱」（クチパク）で通すこと。上海の有名歌手朱逢博女史はあるコンサートに参加したとき，主催者から口を合わせるだけでいいと言われた。朱女史は上手く出来ず，結局自

13）呉亜東「孩子在一串推諉声中死去」，『法制日報』，2000年7月28日

分は本当に歌ったが，他の歌手はみんなスピーカに流した録音に口を合わせただけだった。尻を振るどころか，口を動かすだけで声すら出さずに莫大の収入を手に入れる。ファンはライブに来て生の声を聞きに来たと思ったら，実は目の前の憧れの芸能人は詐欺師顔負けのことをやっている。

八等人交警隊，馬路旁辺喫社会（八等の人間は交通警察，道路に張り付いて社会を食い尽くす）

中国の町には交通整理の専門警察隊がある。交通警察だから大した権力がないので，それほど甘い汁がないと思ったら大間違い。

浙江省縉雲県のある交通警察隊幹部は6年間で，64件の交通事故を処理したが，職務の便を利用していろいろな手口を使って事故保証金など，二十数万元も横領した。しかも父親に車の修理工場を造らせ，事故車を半端強制的に父親の工場で修理させる。断れば事故の処理を引き延ばすか，いいがかりをつけて罰金をする（しかも徴収した罰金は自分の懐に入れる）[14]。

中国の多くの町は交通違反の処罰の基準を公開していない。公開していないから警察官がかなり自由に運用できる。違反者の態度一つで罰金の額が変わる。免許証・車を没収されるかもしれない。そしてそれらを取り返すためどれほど苦労するかは新聞の投書欄を見れば分かる。連日のように信じられないほどの体験談が載っているからなのだ。

交通の番人は実は道路の利用者を食い尽くしている虫である。

九等人跑採購，年年月月喫回扣（九等の人間は仕入れ係，日々リベートを貰える）

いつの間にか中国も売り手市場から買い手市場になった。いまや物が売れない時代である。特に近年のデフレが深刻で，物の買い手を見つけるのは大変である。

少し前まで物不足の時代ではものを売る側の方が立場が強く，買い手が

14)「李可仁横領・窃盗・恐喝案」，『中華人民共和国最高人民検察院公報』案例紹介，1998年第2号

売り手の担当者にリベートを渡して商品を調達しなければならなかったが，最近逆になった。売り手が買い手の担当者にリベートを渡して，物を買って貰う。病院の薬品は象徴的なものである。製薬会社は病院側の仕入れ担当者に莫大な利益を提供して自分の薬品を仕入れて貰っている。最近ある市はその利益を担当者個人ではなく，病院側に渡すように改革して話題になったほどである。

十等人査衛生，不見好処不発証（十等の人間は衛生監督係，金を見せないと許可書を貰いない）

中国に行ったことのある人なら分かるが，町の衛生状況は酷いものである。特に普通の外国人旅行者の目に余り触れない大衆向けのレストラン・散髪屋・風呂屋・自由市場・屋台・トイレなど営業の場（トイレは基本的に有料なので，一つの商売と言える）とその従業員たちは信じられないほど衛生意識が低い。

しかし政府が努力してないわけではない。中央省庁レベルの衛生監督管理機構「全国愛国衛生運動委員会」を持つ国は恐らく中国しかないだろう。省庁改革の嵐に何度もさらわれて，なお「計画生育弁公室」とともに中国の独特の省庁として存在し続けてきた。勿論各地各部門に衛生監督管理機構及び役人が配備されている。衛生関係の規制も多く，条件もかなり厳しい。例えばレストランを開きたいなら，衛生許可書を取れなければ開業できない。

規制のあるところに不正がある。衛生許可書をめぐって，衛生監査部門と開業したい人の駆け引きが続く。手取早い方法は担当者に「好処」（利益）を渡すことで，長い経験から人々が心得ていた。

中国独特の役所にはもう一つある，それは「市容管理」（都会秩序維持管理）部門である。これはなかなかのくせ者で，殆どアルバイトを雇って市容監査をしているにもかかわらず，その権力は人を逮捕する以外（違法監禁もよくやる）警察と殆ど違いがない。罰金を科す・違反物を取り上げなどの面では警察以上に乱暴且つ頻繁に行われる。勿論警察以上に「好処」

で物を言わせる。武漢市新洲区に長期間に強制的に通行者を検査し，理由なく罰金を取る「市容管理」の人員がいると聞いて，その区の人民代表（区議員）蔡耀章が制止しようとすると，逆に何度も殴られ，代表証書・書類と現金まで奪われた。そこの自治体の幹部に話を聞くと，臨時人員だから自分たちと関係ないと答えた[15]。瀋陽市大東区の市容監察者(規定の制服も着用せず）が執務するとき，理由も聞かずに果物を販売している夫婦に暴行する。その女性は妊娠しているにもかかわらず，数十人が殴る蹴るなどの暴行をし続けた。目に余った民衆が彼らを囲み，交通渋滞になってようやく警察が来て夫妻を救出した。他の町で妊婦を病院に送るタクシーがこの人らに捕まえられ，妊婦がいるから先に病院まで送らせてといくらお願いしても聞き入れ貰えず，とうとうその場で死産になった[16]。

この類の権力を楯に民衆を苦しめる準役人に対する庶民の不満と怒りは場合によって，官僚の腐敗と警察官の不正に対する不満より多い。

以上の十等級の人間には庶民の姿が全くない。つまりランク外である。

このような人間をランク付けする「民謡」は地方によって（時期によって)，いろんなバージョンがある。中に庶民をランクインしているものもある。例えば次の「民謡」もはやっている。

一等人是官倒，出了事就有人保，実在不行往外跑；
二等人是公僕，遊山玩水享清福；
三等人搞承包，喫喝嫖賭全報銷；
四等人干租賃，坑蒙拐騙帯小姘；
五等人是明星，掙的票子数不清；
六等人搞個体，掙多掙少帰自己；
七等人干宣伝，隔三岔五能解饞；
八等人是画家，画完螃蟹画大蝦；

15）「武漢人大代表遭暴打」，『華商報』，2000年6月7日
16）「城管暴打妊婦，群衆囲而攻之」，『半島晨報』，2000年7月3日

九等人大蓋帽，喫完原告喫被告；

十等人老百姓，学習雷鋒干革命。

「一等の人間は「官倒」で[17]，不祥事がばれたら庇って貰えるコネがあり，それでもだめなら外国へ逃げ出す；

二等の人間は役人で，海山に遊んで，極楽天国；

三等の人間は請負人で，食い・飲み・遊び・女すべて会社持ち；

四等の人間はレンタル業者，騙し騙されおまけに愛人持ち；

五等の人間は芸能人で，いくら稼いだか数えられない；

六等の人間は自営業者で，いくら稼いでも自分の懐に入る；

七等の人間は宣伝マンで，いつもただ食いできる；

八等の人間は画家で，蟹を描き終わったら蝦を描く（美味しいことの意味）；

九等の人間は法曹関係者で，原告を食い尽くせば被告を食い尽くす；

十等の人間は庶民で，「雷鋒」に習ってせっせと働く[18]。」

順番の違いにあれ，官僚役人は不動の上位を占めている。

Ⅲ．役人天国

3.1　官僚たちの「四つの基本原則」

1979年の民主化運動で危機感を覚えた鄧小平が「四つの基本原則の堅持」という政治概念を打ち出した。具体的な内容は：社会主義の道を堅持する；プロレタリア独裁を堅持する；マルクス・レーニン主義，毛沢東思想を堅持する；共産党の指導を堅持する。略して「四つの基本原則」と呼ばれている。

17)　「官倒」とは権力のコネを使って商売している官僚の親族若しくは役所にコネのある人たちのことである。民衆の一番不満なところであり，その弊害の大きさは天安門事件の導火線にもなったことから容易に想像できる。

18)　「雷鋒」はもともと一解放軍の兵士であったが，事故で亡くなった。その生き甲斐が社会に奉仕することであるため，63年に毛沢東の呼びかけによって全国民の学ぶ典型として樹立された。

しかし政権及び官僚・役人の腐敗ぶりを庶民の目から見れば，次の四つの基本原則に纏められる。

喫飯基本有人請，

喝酒基本有人送。

工資基本不用，

老婆基本不動。

「食事は基本的に招待され，酒は基本的に貰える。給料は基本的に使わぬ，女房は基本的に触らない。」

日本は官僚の接待が大きな問題になって，ビジネスの場合の接待もごく当たり前で，接待天国の勇名をもっているが，中国の接待はこの日本を遙かに越えている。庶民に最も嫌われているのも接待であり，それを風刺する「民謡」が実に多い。のちに「飲食の芸術」としてまとめているので，ここでは省略したい。

タバコ・酒・お茶は中国の三大嗜好品といわれる。人間関係においてはこれらのものは大変重要な役割を果たしている。配給制と物不足の時代だった頃，何をするにしても取り敢えず「研究研究」(検討する) との返事になる。つまり「煙酒（タバコ・酒は研究と同じ発音)」を差し出さないと解決してくれないことをみんな心得ている。時代が変わっても中国ではタバコ・酒の重要性は失なわれていない。昔ほどの神通力はないが，それでもちょっとしたときの第一選択である。そのため貰いすぎで処分に困っている幹部の家庭も結構多い。そういう幹部の集中住宅街にギフト品回収業という新種の商売さえ生まれたほどだった。

現代社会では自営業者以外は給料収入で生活し，家族を養うのが普通であろう。それでも足りなければアルバイトに精を出すか，節約するかしか方法がないのだ。しかしいま中国の多くの幹部や役人は違う。知人は学校の教師で，ご主人は政府医薬管理局の幹部である。このご夫妻の月収は合わせてせいぜい千数百元(約2万円)。しかしその家の内装の豪華さ，家財道具の贅沢さは私が自分の目を疑うほどである。もっとびっくりしたのは

自家用車，しかも日本車を持っていること。自家用車は中国ではまだ庶民とは無縁の贅沢品中の贅沢品であり，日本車のような外車はもっと考えられない。そのため，税金，ガソリン代，修理代などの維持費も大変高く，車一台一人分の給料が足りないくらい。このご夫妻の給料から考えると，どうしても説明できない。要するに彼らはもともと給料で生活しているわけではないのだ。

二十年前まで中国ではまだ男女のことが厳しく，噂だけでも一人の有望な人の前途を滅びさせるほどだった。しかし，経済の自由化に伴い，人々の意識の変化が確実に起こり，男女関係に対して嘗てないほど寛大になった。そして経済的な要素も絡み，いわゆる風俗的な商売も嘗てないほど繁栄し始めた。これは家・もの・お金など手に入れられるものがすべて手に入った一部の権力者にとっても，とても都合のいいことである。物欲を満足させたら，次に湧いてくるのは色欲かもしれない。抑えるのは普通の常識だが，彼らはむしろそれをエンジョイし始めた。風俗まがいの接待，愛人を持つなど，いわゆるノーパンしゃぶしゃぶ接待を思えば，役人の汚いレベルでは中国も先進国入りしたといえるだろう。

なお，このテーマに関して，のち「不倫も文明」という部分でより詳しく述べる。

この「民謡」は政治概念を逆手にとって，幹部・役人の腐敗ぶりを見事に表現している。

3.2 飲食の芸術

3.21 上に政策あり，下に対策あり

統計によると，99年全国一年間，党・政府・国有企業など公費を使った飲食代金は3100億元（約43400億円）にのぼった[19]。しかし1997年の全国教育財政支出は1862億元，学費・民間の教育資金・教育募金など，すべての

19）香港『争鳴』誌2000年3月号によると，「二月十五日，（中国）監察部のレポートによると，99年党・政府部門・国有企業などが公費を使った飲食及び外国旅行は新記録を作り，三千百億元余りに達した。」

支出を合わせても2531億あまりしかない[20]。それに貧困地域の地方役人は飲食費を工面するため，貧弱な教育予算にまで手を出しているというなどの諸要素を考えると，実際の支出はとても疑わしいが，それにしても99年一年間役人たちは97年年間教育支出の総額を遙か超える貴重な税金を接待に浪費したことには驚くばかりである。

実は公費による接待は中国政府を悩ましている官僚腐敗問題の最大問題である。そのため，なんどか公費飲食の暴走にブレーキをかけようとして，数年前にすべての公費による接待は「四菜一湯」（一回の食事は料理四品とスープ一品）にしなければならないとの通達を出し，規制に乗り出した。ところで中国には「上有政策，下有対策」（上に政策あり，下に対策あり）という諺があるように，お役人の知恵により，この上の政策を自分たちの対策によって見事に打ち破った。「民謡」に見られるように：

四菜一湯，糊弄中央；

下郷便飯，哄騙他県。

「四品の料理で中央を騙し，田舎の料理で同級の他県を騙す。」

なぜなら，その四品のマジックがあるのだ：

四菜一湯，因人配方。

一等人山珍海味甲魚湯；

二等人鶏鴨魚肉三鮮湯；

三等人白菜蘿蔔豆腐湯。

「四品料理ワンスープ，相手を見て中身を決める。一等の人間は山の幸に海の幸，おまけにスッポンのスープをプラス；二等の人間は鶏にカモ，そして魚にお肉，スープは肉汁；三等の人間は白菜と大根，せいぜい豆腐スープを付ける。」

ここのいう「一等人」などはただ接待の対象をランク分けしているだけのことで，先の人間のランク付けとは関係ない。接待にはもちろんランクがあるのだ。山の幸・海の幸など，そのランクの料理の代表的な食材を表

20)『中国統計年鑑1999』，中国統計出版社，1999年

している。

格の高い役人を接待するとき，例え出す料理が四品だけでも，その内容はまるで違うのだ。しかも年々格上げしている。次の「民謡」はその変化ぶりを表している。

鶏鴨魚肉趕下台，
烏亀王八爬上来，
燕窩熊掌才够味，
虎鞭虫草最気派。

「鶏・カモ・魚，それにお肉が追い出され，亀・スッポンがはいあがる。燕の巣や，熊の掌は味がよいし，虎のペニスや，冬虫夏草が最も受ける。」

「虎のペニス」・「冬虫夏草」などはただの象徴にすぎないが，つまり同じ四品でも白菜や大根と冬虫夏草ではそれこそ雲泥の差である。最近普通の物を食べ飽きたのか，野生動物，それも珍しく，手に入りにくい保護動物を料理して出すのは最も格調が高いとされる。

商売を楯にしている国有企業の役人はもっと堂々と公費飲食している。しかも四品などの規制を受けない。なぜなら彼ら曰く：

両菜一湯，生意跑光；
四菜一湯，平平常常；
六菜一湯，買売興旺；
八菜一湯，独覇一方。

「料理二品だけなら商売が全部逃げ；料理四品はごく普通；料理六品なら商売繁盛；料理八品では商売を独占だ。」

もちろん国有企業といっても市場経済では他の民間企業と同じ土台で勝負しないといけない。しかし国有企業には国からの補助金があるし，銀行から優先的に政策融資を受ける。そして何よりその生産資料などが国の財産，つまり国民の財産という点を忘れては困る。しかしまさにこの点は忘れがちで，多くの国有企業の請負人は有利な条件を生かして民間企業と経営などで勝負するのではなく，接待攻勢などで民企業と横並びする。その

結果，「喫壊了党風喝壊了胃，喫得企業交不起税」(党のモラルを壊し，胃を壊す，企業を税金が払えないほど食い尽くす)，ところによって職員の給料さえ払えないが，幹部たちは銀行の貴重な融資まで飲食に使ってしまう。

3.22 「タダ」が好き

なぜ彼らは接待に精を出しているのか。なぜみんなの顰蹙を買っているにもかかわらず食いに繰り出すのか。なぜ予算が全くないのに，借金しても，或いは貴重な教育資金，場合によっては貧困救援資金を流用してまで飲食にのめりこむのか？評論家は権力の独占などに原因を求めるが，彼らは違う。彼らには独特の論理があるのだ：

你喫他也喫，
為何我不喫？
不喫白不喫，
喫了也白喫，
白喫誰不喫，
白痴才不喫。

「あなたが食っている，彼も食っている，なぜ私は食ってはいけないの？食わなくてもおなじだから，食っても同じだ。タダだから誰が食いたくないの，食わないのはバカだけだろう。」

つまり「みんな渡れば怖くない」という論理だろう。現実にいま中国では接待で飲み食いするくらいで処分を受けることは基本的にない。なぜならこれより大きい汚職事件が山ほどあるから，検査機関はこのくらいのことをいちいち取り締まるのは不可能なのだ。所詮一部の監査機関自身も接待などを当然のように受けているから，人のことが言えないだろう。

具体的にどんな場合にただ食いできるのか。「民謡」は次の十種類の場面を取り上げた。

外出弁事明着喫，
上級来人陪着喫，

村里開会大家喫，
私人会客公款喫，
逢年過節請官喫，
企業来人卡着喫，
站長所長湊着喫，
親戚朋友跟着喫，
老婆孩子伙着喫，
没事找事也得喫。

「出張なら堂々と公費で食い，上司（上級機関の役人）が来たら接待だ。村に会議があったら大宴会，個人のお客まで公費使い。年末年始は上を招待し，企業の人が来たらカモにする。この長あの長集めれば宴会で，親戚・友達がついでに食ってしまう。女房から子供まで一緒に食い，名目がなけりゃ探すさ。」

これはユーモラスな農民たちが村の幹部を風刺する作品だが，大体都会の幹部（役人）も同じと言える。

3.23　効果抜群

これほど批判されながらまだ厚かましく公費飲食を楽しんでいるが，その効果のほど？これはやはり当事者じゃないと分からないから，彼ら自身に解釈を委ねよう。

酒杯一端，政策放寛；
筷子一提，可以可以；
酒足飯停，不行也行；
飯飽酒酔，不対也対。

「グラスを手にすれば，政策を緩められる。お箸を手にすると，なんでもオーケーだ。お腹を一杯にすれば，駄目なことも可能だ。お酔いになると，間違いも見逃して貰える。」

庶民から見ればただ食いにしか見えないが，彼らに言わせると，勿論付

き合いであり，「仕事」である。お互いに感情を深めなければならないから，飲まないといけないのだ。もちろん誰とでも同様に付き合うことはない。彼らは彼らなりの基準があるのだ。

感情深，一口悶；

感情浅，舔一舔；

感情薄，喝不着；

感情厚，喝不够；

感情鉄，喝出血。

「仲が深い場合，一気のみ；仲が浅い場合，なめる程度；関係が薄い場合，飲まない，関係深い場合，いくら飲んでも飽きない；鉄の仲間なら，死ぬほど飲む。」

これは彼らの飲みの原則である。

3.24　飲食の鉄人

では一体どのくらい飲んでいるのか？それはまさに「鉄人」と呼べるほど凄いものである。

一両二両漱漱口；

三両四両不算酒；

五両六両扶墻走；

七両八両還在吼。

「1両2両はうがい程度，3両4両は酒飲みとは言えない，5両6両は壁に凭れて，7両8両を飲んでもまた叫ぶ。」

「両」は中国伝統の計量単位で，1両は50グラム。ここの言う「酒」も中国の「白酒」のことで，昔はアルコール度数60を越えるのは普通であったが，最近少し抑えている。それでも35度以上である。このような「民謡」はよく数字をそろえるまで続くので，数字自身に拘る必要はないが，参考として十分説得力を持っている。一般に酒に強い人と言われても「白酒」なら2・3両程度が限度だが，5・6両，7・8両，或いは1斤くらい飲

むのは希である。弱い人は急性アルコール中毒になるところを，公費でただ食いを専門とする「鉄人」たちはビクともしない。長い間鍛えてきたからこそできることだろう。そのため，自慢する人は少なくない。

そしてこのような「鉄人」たちは，実は食い飲みが得意なだけではないのだ。

喝起酒来両三瓶不酔；
打起牌来三四宿不睡；
跳起舞来五六歩都会；
喫起席来七八盤不累；
弁起公来甚麼都不会。

「酒を飲むなら2瓶も3瓶も倒れない；麻雀するなら3日も4日も眠らない；ダンスするなら5歩も6歩も難しくない；接待されたら7皿も8皿も疲れを感じない；仕事するなら何もできない。」

よく遊ぶ，よく働くという生き方は理想的だといわれるが，こと中国の一部の官僚になると，よく遊ぶだけで，いざ働くになると何もできない。そもそも働くという意欲がもともとなく，働かなくても誰も文句を言わないし，何もできなくでも何かの処分があるわけでもないから，むしろ働く方がおかしいと言えるかもしれない。

このような鉄人官僚に関する「民謡」はバリエーション豊かで，次のようなものもある：

喝白酒一斤二斤不酔；
下舞場三歩四歩都会；
打麻将五夜六夜不睡；
正経事七年八年不会。

「酒を飲むとき1斤も2斤も酔わない；ダンスなら3歩も4歩もでき；麻雀するなら5夜も6夜も連続し；まともな仕事なら7年も8年もできない。」

打麻将三天五天不累；

喝茅台三瓶五瓶不酔；

下舞池三夜五夜不睡；

正経事三年五年不会。

「麻雀するなら3日も5日も疲れを感じない；マオタイ（酒）を飲むなら3瓶も5瓶も酔わない；ダンスするとき3夜も5夜も眠いを感じず；仕事なら3年も5年もできない。」

これら共通しているのは「酒」・「麻雀」・「ダンス」，そしてできないことは「仕事」である。「酒」・「麻雀」あたりは昔からあったので，程度の差こそあれ，意外ではない。不思議に感じるのは「ダンス」（跳舞）である。漢民族は基本的に歌・踊りが下手で，あまりしないといわれる。しかしいまやカラオケ・社交ダンスが凄まじい勢いで広がっている。保守的で，文化的に非常に遅れている農村地域でも露天のダンスホールが現れたほどである[21]。その原因は色々あろうが，風俗業を認めてない中国ではこれは一番合法的で，手短な異性との接触の場という点は見逃せない。常に娯楽の先端を走っている官僚なら，この波に乗らないことは勿論ない。彼らは年輩の方が多いから，動きの激しいディスコなど嫌い（所詮求めている体の接触がないと思っているのかもしれない），手を掴まえてゆっくり回る社交ダンスがとても好まれる。

そもそも現在の都会の官僚たちはダンスところではない，もっと刺激的な接待などに夢中になっているから，これらの「民謡」はむしろ田舎の人による田舎の役人像である。

もっと皮肉的なのは毛沢東の有名な詩を使って「鉄の役人像」を引き立てる「民謡」である。

公僕不怕飲酒難，

万杯千盞只等閑。

21）1999年の夏，故郷の田舎に帰ったとき，人口千人くらいの村に庭を利用して開いた営業用ダンスホールは三四軒もあった。話によると一年前はもっと多かったが，最近景気が良くないので，少なくなったそうだ。

「習水」「洋河」騰細浪，
「孔府」佳釀走泥丸。
「酒鬼」下肚肚里暖，
「特曲」壮胆胆不寒。
更喜「茅台」「五糧液」，
諸君飲後尽開顔。

「公務員は酒を飲む困難に挑み，千杯万杯でもビクともしない。「習水」・「洋河」は細波であり，「孔府」だって泥道を歩くくらい。「酒鬼」でお腹を暖め，「特曲」で肝を鍛える。さらに「マオタイ」・「五糧液」を飲んだら，みんな笑いが堪えない。」

共産党は「人民のために奉仕する」（為人民服務）と宣伝しているので，官僚を人民の「公僕」（人民のために奉仕する人）とよく例えている。人々は彼らを皮肉るときも敢えて「公僕」を使う。つまりこの言葉自身すでに皮肉の意味を含んでいるのだ。「習水」・「洋河」・「孔府」・「酒鬼」・「特曲」・「マオタイ」・「五糧液」などは全部いま中国で話題の酒のブランドであり，「マオタイ」クラスになると，一本が普通のサラリーマンの月収三分の一から二分の一に当たる。

因みに原詩は毛沢東が1935年10月に「長征」を題として書いた物である。比較しても面白いから写しておく：

紅軍不怕遠征難，	紅軍は遠征の難きを恐れず，
万水千山只等閑。	万水千山　ただ　等閑。
五嶺逶迤騰細浪，	五嶺は逶りに迤りて　細き浪を騰らせ，
烏蒙磅礴走泥丸。	烏蒙は磅　礴　泥の丸を走がす。
金沙水拍雲崖暖，	金沙の水拍ちて　雲崖　暖かく，
大渡橋横鉄索寒。	大渡の橋横わたして　鉄索　寒し。
更喜岷山千里雪，	更に喜ぶよ　岷山　千里の雪，
三軍過後尽開顔。	三軍　過ぎてのち　尽く　開顔。

——武田泰淳・竹内実（「毛沢東　その詩と人生」，文芸春秋より）

3.25　困った！

ここまで飲んだらどうすればよいのか。庶民は鉄人たちの奥さんの口を借りて，いろいろな機関に何とかしてと相談するが，さてその結果は？

革命小酒天天酔，
小小酒杯真有罪：
喫壊了腸子喝壊了胃；
喫垮了企業交不起税；
喝倒了革命老前輩；
喝垮了党的三梯隊；
喝得老婆背靠背，
生育指標作了廃。
老婆去找婦委会，
婦委会説：
有酒不喝也不対，
喫喫喝喝不犯罪；
老婆去找紀検会，
門口碰見老門衛。
老門衛説：
昨天上級来開会，
七個常委四個酔，
還有三個賓館睡；
老婆去找政協会，
政協説：
我們也想天天酔，
可惜没有這機会；
老婆去找人大会，
人大説：
一年只開幾次会，

没貪汚，没受賄，
這種小事排不上隊；
老婆去找家委会，
家委説：
你不酔，我不酔，
馬路旁辺誰来睡？
大不了是送医院，
反正医療是公費。

「革命的な酒で毎日酔っぱらいだから，この小さい酒杯も正に罪深い。腹を壊して，企業を税金が支払えないほどに食い尽くす。革命の先輩たちが倒れ，党の後継者まで駄目にしてしまう。奥さんが怒って背をそむけ，子供を生む指標もを無駄にしてしまった。困った奥さんは婦人委員会に上告した。婦人委員会の方が答えた：酒があるのに飲まないのは良くない，ちょっと飲み食いくらいなら罪ではない。奥さんは党の紀律検査委員会に行った。そこで年寄りの警備員にあった。老警備員はいった：昨日上級機関の方が会議に来た。そのため七人の常務委員の内四人まで酔っぱらい，残りの三人はまだホテルで寝ている。奥さんは政治協商会議に行った。そこの方は答えた：私たちも毎日酔うほど飲みたいが，残念ながらそのような機会がないのだ。奥さんは人民代表大会に行った。人民代表大会の人が答えた：私たちは年間数回の会議しかない。横領でもないし，賄賂を受けたわけでもないから，このような些細なことは話題にならない。奥さんは最後に町内会に相談した。町内会の方は答えた：あなたが酔わない，私も酔わないなら，誰が路側帯で横になるの？事故になってもどうせ医療費は国が支払うさ」

新中国は革命でできた国なので，「革命」という言葉には特別な響きがある。「革命的」なことならいいことというイメージを人々は持っている。裏返せば「革命」という修飾語を使えばどんなことでも正当化できる。例えば「革命工作」(仕事)・「革命幹部」(官僚)・「革命服装」・「革命髪型」・「革

命新聞」などなど。文化大革命中はなんでも「革命」という修飾語を使う。極めつけは「喫革命飯，拉革命屎，睡革命覚」(革命的な飯を食べ，革命的な便をし，革命的な睡眠をとる)，正にブラックユーモアである。随って，役人たちが悪いことするはずがないから，その飲食も勿論「革命」，つまり立派な仕事であると，この「民謡」は皮肉っている。

「革命老前輩」は分かりやすいが，「党的三梯隊」とは？中国共産党の幹部制度は選挙ではなく，上が下を抜擢するという指名制である。後継者を育てるのもこの制度の大きな特徴である。現在の長を一番手として，原則的に副長は二番手とする。そして将来的に長になって貰いたい人を三番手として，「第三梯隊」と名付けて重点的に育てるのだ。しかしこのような将来有望な人でも「酒」の前では全く無防備である。

ここで「計画生育」について少し話さなければならない。「計画生育」は普通「家族計画」と言うが，中国の「計画生育」は家族が子供のことなど自分たちの将来を計画するのではなく，国が人口の増長を抑えるために「計画」的に本来人々の自主性に委ねるはずの「生育」(子供の数)をコントロールするのだ。原則的に夫婦二人で子供一人という「一人っ子政策」を取っている。それでも無計画に生むことを懸念して，職場・町（居民委員会)・村など，最小の行政単位ごとに，毎年子供を産む計画を与え，その計画を越えた子供が産まれたらボーナスの削減とか，幹部の処分とかいろいろなペナルティーを科す。つまり子供を産みたい場合，予め自分の所属の行政機関から許可を貰わなければならない。その許可は「生育指標」と言うのだ。せっかく貰った「指標」を無駄にしたら次がなかなか回ってこないので，毎日のように外で酒を飲んでいる主人を持つ奥さんが怒るのも理解できる。

女性は何か家庭の問題があればまず相談に訪れるのは婦女委員会である。共産党が国民の育ての親のように，婦女委員会は女性の「実家」――味方だと宣伝しているのだから。しかしその婦女委員会はこのようなことについてさすがに打つ手なし，しかも飲食くらいならまだ可愛いもんだといわ

んばかり。

困った奥さんは勇気を出して風紀取り締まりの本家本元の紀律検察委員会を訪ねた。しかし飲食くらいのことで紀律検査委員会が動くはずがない。取り締まり官自身も飲んでいるからなのだ。

奥さんは政治協商会（政協）を訪ねるが，これは全くの無駄である。中国の政治体制では政治協商会は只のご意見番で，政府（役人）がその意見を聞くか聞かないかは全く自由なのだ。許認可などの権力がないため，接待されることも勿論ない。毎日山の幸海の幸を食べて，有名な酒を飲んでいる他の機関の役人を横で見ていると，羨ましがるのも理解できる。

各自治体の人民代表大会は日本の自治体議会のように，立法及び政府監督が主な仕事だが，中国の場合，それは殆ど象徴にすぎない。ほぼすべての権力が政府の長にあるので，法律を制定しても守る人がいなければ，守らない人を取り締まる人もいない。そして腐敗のレベルがもう飲食くらいではなくなったので，このような訴えを相手にしてくれない。

最後に居民委員会（農村では家庭委員会という）に相談に訪れるが，これは恐らく只「民謡」を面白くするだけなので，実際居民委員会は殆ど権力もないし，誰をどうするかもできない。だから「まあいいか，どうせ公費医療だから……」と諦めさせるのが精一杯である。

この「民謡」は比較的に長く，飲み食いに没頭している鉄人官僚の奥さんを主人公にしているのが特徴で，接待飲食の弊害を鋭く説いた。最も興味深いのは各機関を登場させ，それぞれの本当の姿（少なくとも庶民の眼中の）を暴き出していることだ。

3.3　乗り物も身分

乗り物に関しても中国独特の事情がある。乗用車など自動車はそれこそ高嶺の花で，庶民とは関係ない。でもこと幹部役人になると話が違う。昔から役職ごとに乗用車を割り当てている。もちろん昔はかなりの階級じゃないと自動車に乗れないが，いまは少し大きな機関の係長クラスでも公用

車が配分されている。農村地域も負けてはいない。幹部のための乗り物を購入するためならいろんな手を使って資金を工面する。

例えばこのような「民謡」がある：

中央首長空中行，
省地領導両頭平，
県上領導帆布蓬，
郷鎮企業130，
百姓只有自来鈴。

「中央の幹部は飛行機に乗り，省・地区の幹部は乗用車，県の幹部は四駆，郷鎮企業の幹部は軽トラック，庶民は自転車あるのみ。」

「帆布蓬」とは五十年代旧ソビエトから導入して北京産の軍用四駆のこと，車体が帆布で覆われているからこういわれる。「130」も北京産の軽トラックのことで，この「民謡」は少し古い。この数年各階級各部門の役人は競うように車の乗り換えを進めている。目当ては勿論外車で，日本車はその優れたコストパフォーマンスで好まれている。それでも高いから，国が役職ごとにどのレベルの車に乗れるかを決めている。そこで外車に乗れるレベルじゃない官僚は密輸入車にまで手を出してしまう。いま県レベルの幹部で国産の四駆を乗る人は全国でもまれであろう。

乗り物に対する役人たちの飽きない追求ぶりを次の「民謡」が歌っている。

地委書記車子好，不是豊田是藍鳥；
県委書記也不差，起碼有個桑塔納；
区委書記窮燒包，給個吉普還嫌孬；
村里書記活現眼，騎個電驢到処転。

「地区の党書記の車は素晴らしい，トヨタではなくブルーバードだ；県の党書記の車もそれなりにいい，少なくともサンタナだ；区の党書記はさすがに元気がなく，四駆があるのにイヤというのだ。村の党書記は恥をさらすとも知らず，ミニバイクで走り回るのだ。」

「トヨタ」とか「ブルーバード」などは語呂を合わせるための意味合いが強く，ここは外車を指している。中国の行政単位は省と県の間に地区というのがある。幾つかの県を一つのブロックとして纏める役割を果たしている。「桑塔納」（サンタナ）は上海とドイツの合弁企業が生産されているいわば国産の乗用車である。先の「民謡」といい，この「民謡」といい，全部農民の作品であることは間違いない。例えが素朴で，最後に村の幹部を皮肉るのがミソである。

しかし大都会の役人は勿論サンタナレベルではないし，国有企業に至るともっと凄い物になっている。いま殆ど請負制になっているから，企業の経営者が資金を支配する権力を持っているので，どんどんいい車に乗り換えて，殆ど暴走状態である。

単位銭雖少，領導坐藍鳥；

企業欠着銭，廠長坐豊田；

寧可去貸款，也不坐国産。

「予算が少ないのに，幹部がブルーバードに乗っている；企業は借金だらけなのに，社長がトヨタに乗っている；借金までしても，国産車に乗りたくないのだ。」

役所など国及び地方の機関はもちろん税金で賄っている。地方になると税収入は豊かでないところなら役所といっても火の車。それでも幹部たちは外車に乗る。企業では銀行からせっかく融資を貰ったのに，それを生産に使うのではなく，自分の享楽に使ってしまう。酷いところでは従業員をリストラして，給料を払わなくても，かれらは平気で外車を乗り回して，豪遊しているのだ。つまり国産車ではもう満足できないのだ。

専門家は「公用車消費は国の財政の破綻につながる」と警告している。確かな数字は誰にも分からないが，全国の政府部門だけでも公有車は百万台を越えている。国有企業及び社会団体・事業部門が保有している公有車を含めると，200万台近くあるはず。標準的な乗用車（国産車）の価格と諸費用を加えると，一台およそ15万元。保守的に計算しても3000億元前後の

資金がかかる。それだけではない，中国はいままで運転することは専門職であるという意識が強く，200万台くらいの車があるから，200万人くらいの運転手を雇っているはずだ。そして修理代・ガソリン代・維持費などもバカにならない。これらを合わせると，一台の公用車における年間の維持費だけでも2万元を超えている。200万台なら軽く400億元を突破してしまう[22]。1998年国の財政収入は9875.95億元だから，公用車消費は国家財政収入の三分の一以上に匹敵するくらいなのだ[23]。

しかし，中国ではいい車に乗るだけならまだましなことだ。もっとたちが悪いのは特権を悪用することなのだ。ある町に次のような「民謡」がはやっている：

自従有了T，街上有点擠；

自従有了O（蛋），街上有点乱；

自従有了U，警察是個毬。

「T類のナンバープレートが現れて以来，道路が狭くなった；O類のナンバープレートが現れて以来，道路が混乱し始めた；U類のナンバープレートが現れて以来，交通警察もただの人になった。」

中国の車はナンバープレートの頭にローマ字を使って分類しているのだ。例えば「WJ」を頭としているのは「武装警察」（機動隊？）など。Tをはじめとするのがタクシーである。中国では一台のタクシーの営業免許はその車自身の数倍の金額がかかる。そのため何人かの運転手が交代で昼夜懸命に客を取らないと免許代すら払えないのだ。そして車本体に営業用などの規制があるが，誰が運転するかにはあまり規制がないのだ。例え昨日運転免許を取ったばかりの人でもタクシーを運転してしまう。運転免許でも担当警官との裏取引で教習所通わずに取れるから，運転のテクニックからマナー・交通安全など至る面に問題がある。しかも企業などのリストラなどで，いまは田舎町でもタクシーだらけになっている。猛スピードでマナー

22)『汽車神話』，王法，北京大学出版社，1998年
23)『中国統計年鑑1999』，中国統計出版社，1999年

を無視して走り回っているタクシーは庶民から見れば迷惑千万なのだ。

しかしタクシーは交通混乱の原因の一つにすぎない。交通を管理している警察自身が実は交通混乱に深く加担しているのだ。もともと警務の特殊性を考慮した措置と思うが，警察所有の車に特別の「O」で始まるナンバープレートをつけている。そのため，交通警察はOのついたナンバーの自動車を全く規制しない。いくら交通違反しても取り締まりしないのだ。これは警察による官官保護だろうか。

もっと質が悪いのはUのナンバー。これは省政府が自分たちに作らせたナンバーなのだ。昔の役人が馬車に乗って，通行人を威嚇するのと同じように，自分たちは地方では最も偉いと言わんばかりに，このようなナンバーの乗用車に乗って人々を威嚇したいのかもしれない。交通ルールは彼らには全く通用しない。赤信号であろうが，逆行であろうが，対向車線であろうが，全く無視されるのだ。しかも一種の驢馬の叫び声に似ている，特殊なクラクションを鳴らしながら，無人の地にでも入ったように猛スピードで自動車・自転車・歩行者で混み合う街を暴走する。つまり何に違反しても警察は取り締まりの対象にしない。考えたら警察官も怖いのだ。もしそのような自動車を普通のと同じように取り締まったら，それこそ自分の身の安全を考えないといけなくなる。

普通警察のパートロール用車とか，政府高官の緊急と要する場合に使う自動車とか，軍隊など特殊の用途の自動車などがに特別のナンバープレートをつけ，交通整理する警官が一目で分かるようにして，ある程度配慮するのは理解できる。しかし中国の場合，軍隊のなら軍用車だけじゃなく，生活用，引いて家族用の車まで軍のナンバーをつけてしまう。警察も，政府機関も同様，公務用だけではないのだ。しかも公務用車でも公務で出動するとは限らない。幹部の奥さんの買い物とか，運転手の妹の結婚とか，友人の葬式とか，何でも公用車をつかう。そういうわけで，街中特別ナンバーを着けている車がなんのルールも守らずに走り回っているから，真面目に交通ルールを守っている庶民はたまらない。みんな殆ど不満と怒りを

通り越して，笑い物でも見ているような気持ちで見ているのだ。

もっとも，最近一部の大都会ではこのような特別ナンバーを廃止する傾向が見られるが，このような風がいつになったら田舎町まで吹くのだろう。

3.4　会議の鉄則

以前から「国民党的税多，共産党的会多」(国民党は税が多い，共産党は会議が多い）との「民謡」がある（もっともいまの中国は税も少なくない)。会議は中国の官僚の最も大事な仕事であろう。

会議がよくあり，時折り毎日あるが，お役人たちはどのように対応しているだろう。大変だろうと杞憂してしまうが，意外に役人たちは会議の応対マニュアルができていて，会議を謳歌しているとすら感じる。

会前定調子，
会上排位子，
会中念稿子，
会後拿筷子。

「会議の前に基調を決める，始まるとき坐る順番を決める，会議中に棒読みし，会議が終わったら宴会だ。」

役人の会議は別に問題を提起してみんなで討論するのではなく，殆どの場合，上が下へ方針政策を伝達するか，何かの長が講演するかだ。だから会議を組織する段階で何をどう話すかを前もって決めておかないといけない。特に政治の風向きに気をつけないといけない。下向きの風に乗ってしまえばそれこそ政治生命の終わりなのだ。もう一つ重要なのは座席の順番である。なぜならそれこそ参加者の身分を表しているので，一つ間違えると大変なことになってしまう。会議が始まると，秘書が準備してくれた原稿を読むだけで済むのだ。なによりの楽しみは会議が終わると，公費による大宴会が待っていることだ。

同じような「民謡」がまたある。

会前握握手，

会上挙挙手，
会完拍拍手，
会後不動手。

「会議前にお互い握手，会議中に手を挙げる，散会の時拍手，会議が終わったら動かない。」

会議の前後に握手し，拍手などして，会議が終わって手を挙げて決議したことをいざ行動に移すとなると，全く動かないのだ。つまりまともな仕事をしないということである。

出張会議になると，一層よろしい。なぜなら出張扱いで，旅ができるのだ。

一天会議両天玩，
四天五天是参観，
六天七天算中転，
八天九天把家還，
回来還得歇一天，
湊足十天報万元。

「一日の会議に二日間が遊び，四・五日目は見学だ。六・七日目は乗り換え用，八・九日目に家に帰る。帰ったら一日を休み，十日間に足したら一万元の経費だ。」

中国の旅費制度は実費制である。使った分，職場の会計係で精算する。勿論旅費のランキングがある。どの級の幹部はどのレベルの乗り物に乗るとか，どのレベルのホテルに宿泊するとか，一応の取り決めがある。しかしそれはあくまで目安で，絶対的ではない。何を公費で賄うか，何が公費では駄目かを主管幹部のサイン一つで決める。これこそ「人治」社会の幹部の美味しいところである。一日だけの会議なのに，十日間もかかってしまう。それでもたっぷり十日間の旅費を貰える。面白くするために極端なことを表現しているが，実態は普通の人には分からない。

3.5　官僚の仕事

さて，お役人たちは毎日どのようにお仕事をしているのだろうか。

上午随着輪子転，

中午囲着杯子転，

下午囲着骰子転，

晩上囲着裙子転。

「午前は車でドライブ，昼は宴会で乾杯だ。午後は麻雀で一休み，夜は女に夢中だ。」

車でドライブといわれては少々かわいそうかもしれない。お役人してみれば下へ視察に出かけているのだから，れっきとした仕事である。ただ普通の人から見れば何もしてないからドライブのほかの何ものでもないのだ。しかも上の方が来たから，官官接待の宴会が勿論欠かせない。宴会が終わったら余興として麻雀くらいはせずには済まない。夜になると娯楽三昧で，ダンス・酒，そして今はやりの風俗で楽しんで一日が終わるのだ。

今年七月十一日，雲南省永善県郷鎮企業局長の杜明祥氏は昼から公費で他の幹部たちと飲食し，午後になってまた県の経済貿易主任の接待で公費飲食。二次会にホテルのカラオケバーでホステス同伴でカラオケを楽しんだ。しかし昼から飲み続けたのでアルコール中毒に陥り，そのうちホテルで死んでしまった。怒った奥さんはホテルのオーナーに噛みつき，とうとうそのオーナーを自殺に追い込んだ[24]。一年中無制限に公費飲食していて，そのため命を落としてしまった幹部官僚の数は少なくないはずだ。この事件は家族の騒ぎでことが大きくなって明るみに出たので氷山の一角にすぎない。「中国青年報」によると，広東省湛江市麻章区に専門接待課がある。そこの課長の方景良が数年間ホテルの風俗紛いのサウナ，マッサージなどの接待に使った公費は三十数万元，人呼んで「サウナ課長」。その「サウナ課長」の「気持ちいい接待」を受けた幹部は数え切れない。その効を奏し

24)「局長酔死温柔郷・親属逼死老板娘」，南方報業集団オンライン，2000年10月6日

て，市の共産党組織部に抜擢栄転され，一時市民の間は騒然とした（それでもビクともしない)。幹部たちはいかに風俗まがいの接待を好んでいるかを垣間見ることができる[25]。

3.6 官僚の心得

役人になった以上，その道を極めたいならどうすればいいのか。平凡な役人で終わるか，幹部官僚として出世するのか，その分かれ目はどこにあるのだろう？

前にも述べたが，中国の幹部制度は抜擢制で，上級機関が下級機関の長を指名する。ならば話が簡単だ。河南省滑県の共産党書記王新康が1993年から1998年の五年間で，幹部の任用権を独占し，四十人以上の人から70回あまりの賄賂を貰った。その総額は365237元にものぼった。彼は数年間のあいだ何の恐れもなく公然と官職を売っていたので，滑県に「官位要長，快找新康；位置要動，快把銭送」(出世したいなら新康に頼め；昇進したいなら金を貢げ）という独特の「民謡」がはやるほどだった。しかし彼が書記だった五年間，この県の主な経済指数はすべて大きく下げた。しかも彼が貰った金の多くは公的な資金であった。その理由は賄賂する者が職権を乱用して所管機関の事務予算などを貢いだからだ。そのためか，この県の職員と学校の教師の給料の未払いが多発した[26]。

これは決してこの県書記だけがやっていることではない。だから「民謡」は人より早く且つ確実に出世する道を次のように指摘している。

会做不如会説，
会説不如会拍，
会拍不如会塞。

「仕事ができるより喋り上手；喋り上手よりゴマすり上手；ゴマすり上手より金で攻める。」

25) 「桑拿科長洗進組織部」，『中国青年報』，2000年7月5日
26) 「売官鬻爵的県委書記」，『民主与法制』，1999年第12号

或いは：

只干不送，原地不動；

只跑不送，平級調動；

連跑帯送，提抜重用。

「仕事をするだけで何も貢がないなら万年ヒラ；コネを使うが貢がなければ横滑り；コネも使うし何でも貢ぐなら抜擢される。」

最近明るみに出た安徽省阜陽市と蒙城県官職売買事件も雄弁に物語っている。この市の前市長肖作新は自分の営みを「民謡」風に次のようにまとめている：「当官不発財，請我都不来；当官不収銭，退休没本銭。」(もし官になっても金持ちになれないなら，お願いされても私は断る；官になっても金銭を貰わないなら退官したら貧乏になる)。そういうわけで，彼はすべての官職を売りに出した。もちろん市以下の各政府の長も彼をまねる。しかも官職を売るだけではない。冠婚葬祭はとても重要な財物を集める機会だし，時折病気を装い入院して財物を集める。なぜなら入院すれば官職を買いたい人の格好の貢ぐチャンスになるので，見舞いの名目で爆発的に金を手に入れる。そのためこの県の幹部は病気でなくても入院するという珍事が日常的になっている。一旦官職を手に入れると，たちまち金持ちになるから，阜陽市及び蒙城県あたりでは官職を買うことが一番有利でリスクのない投資と見なされた[27]。

つまりこのご時世では金を使わないで出世できると思ったら大間違いだ。私の知っている県でもほぼ毎年，幹部の意図的な移動がある。訳を聞くと移動が行うたび昇進を狙う人たちが競って党の書記ら人事権を持っている幹部に金品を送る。そのため彼らはあっという間に財産を増やせるのである。一度味をしめてたらやめられない。だから毎年のように幹部の移動を行うのだ。

幹部制度の弊害は明らかである。そのため，少し前に政府は幹部の「四

27) 于林才「阜陽揭開買官売官黒幕」，『中国青年報』，2000年9月8日

化」という方針を打ち出した。「四化」とは幹部の「革命化・年軽化・知識化・専業化」（思想・年齢・学歴・専門）を指す。つまり幹部を抜擢するときにこの四つのキーワードで選考する。だが実際は：

年齢是個宝，
文凭少不了，
後台最重要，
徳才做参考。

「年齢は宝で，学歴も大事である。しかし後ろ楯が最も重要で，資質・才能はただの参考さ。」

若さ・学歴など確かに重要だが，何よりコネが一番なのだ。資質・才能等最も重要なはずの部分は明確な基準がないから，抜擢する側にとっては好都合である。自分にとって都合の良い人，コネの強い人，見返りをしてくれそうな人，金を持ってくる人など，いくらでも自由に選択できるのだ。

そして一口官僚といっても，いろいろな部門がある。どの部門に所属して，どの部門についていくか，これもまた奥の深い学問だ。そのためにいつも移動に精を出すし，何かを貢ぐのだ。

跟着宣伝部，総是犯錯誤；
跟着統戦部，沾光受照顧；
跟着外交部，出国如散歩；
跟着組織部，年年有進歩。

「宣伝部についていたら，いつも間違いを犯す；統戦部についていたら，いろんな面で配慮される；外交部についていたら，海外出張も散歩の如く；組織部についていたら，毎年昇進がある。」

「宣伝」部門は共産党の広報部門で，党の方針政策などを広く宣伝し，党員教育などを行う部門である。ところで「人治」の政党だから，トップが変われば方針政策など180度変えるのもしばしば。後任は前任を批判するのはよくあることで，当然宣伝担当者は前任の「間違った政策」の加担者とされ，一緒に批判され，左遷されてしまうこともあり得る。「統戦部」と

は「統一戦線」部門のことで，遡れば抗日戦争につながる。日本と戦うため，共産党と国民党がそれぞれの主義主張を暫く潜めて，統一戦線を作った。そのときから共産党の組織に「統戦部」ができた。昔から社会名流，民主政党などを囲むために活躍してきた。いまでも台湾・香港，また民主政党，共産党員以外の名人などを共産党に有利になるように活躍している。そのため，多くの有名人などを傘下に囲み，不満などを抑えるために生活面などによく気を配る。だからこの部門で働いていたらお陰を被ることも多いだろう。そして中国の経済現状では海外へ行くのはまだ大変なことで，外交部門で働くと海外へ行くチャンスがもちろん多く，憧れの的になる。組織部は共産党の幹部を選任・評価する部門であり，昇進したいならこの部門についていかないと無理だろう。

官僚体制の中ではもっと複雑で，もっと不思議なことが多いはずだ。しかし庶民は知らないから，各部門の役割といままでの経験を加味してこのように歌っているだけなのだ。実際，現在の役所の中で一番美味しいとされる部門は工商管理局・税務署・警察署などである。なぜなら実権が大きい分，誰も怖がるし，賄賂なども簡単に貰えるからなのだ。